# 特集にあたって

高　木　　裕

人文学部「〈声〉とテクスト論」研究プロジェクト並びに新潟大学コアステーション「〈声〉とテクスト論研究センター」が，ボルドー第３大学の研究グループ「モデルニテ」と継続して共同で取り組んできた「声･テクスト･制度に関する比較総合的研究」も４年経過した。ボルドー第３大学「モデルニテ」研究グループ（代表：エリック・ブノワ）と連絡を取り合いながら，平成23年以降，共同でシンポジウム，ワークショップを開催してきた。

シンポジウムに参加したフランス人研究者の発表では，支配言語である（あるいは支配言語であった）フランス語で執筆する作家・詩人が，母語である現地語発話にかかわる記憶と経験によって，まったく新しいエクリチュールの創造に到る過程が明瞭に示された。今日，フランス文学ではなく，フランス語圏文学を語ることの意義は，そこにある。

たとえば，平成23年９月のシンポジウム「〈声〉の制度 ― 継承･障害･侵犯 ―」でのマルティーヌ・ジョブ Martine Job の講演「言語の単一性のもとにおける，フランス語圏の声の多様性」は，旧フランス植民地の国々で生まれたフランス語圏の文学について，言語の単一性に抑圧されていたさまざまな〈声〉が，フランス語と現地の言葉との軋轢・融合の歴史を経て，作家たちの眠っていた記憶を掘り起こし，独特な語り口を創造するに至ったことを示すものであった。

また，昨年３月のピエール・ラフォルグ Pierre Laforgue の講演「言語，声，ポエジー ― エメ・セゼールの『帰郷者ノート』におけるパロールの詩学と政治－」は，フランスの植民地マルチニック島に生まれ，ネグリチュード（黒人性）の文学を提唱したエメ・セゼールの『帰郷者ノート』の〈声〉に関するものであった。この作品では，抑圧からの解放を求める叫び，言葉，そして歌へ

と〈声〉は反抗の詩（ポエジー）を形成するが，同時に「ノート」である作品は，フランス語という支配言語（ラング）とエクリチュールの制度・枠組みの中に囚われていること，「ノート」のエクリチュールとネグリチュードの〈声〉との緊張関係の中で，セゼールのポエジーは生成しているとラフォルグは指摘した。

これらの講演から，国家言語との相克，異文化との対峙の中で，作家・詩人たちの発語は，主体の記憶に眠っている原初の言葉を掘り起こし，身体に吸収した言葉をはき出し，身体の奥底にある情念・記憶と密接につながっており，この身体的経験がエクリチュールに〈声〉の身体性，生身のニュアンスを取り込むことを容易にしていることを確認することができた。テクスト生成の原点にある〈声〉の体験に対して，当然，テクストと〈声〉の関係で言えば，逆にテクストによって立ち上がる〈声〉，テクストが生成する〈声〉という観点もあるわけだが，今回のプロジェクト特集では，このテクストと〈声〉の相関関係をさまざまな形で考察する分析が目を引いた。

斎藤陽一氏の論文「日本におけるスタニスラフスキー・システム その２」は，1950年代小山内薫が考案した演出法に，歌舞伎とは異なった演出法，いわば，テクストを〈声〉にするための新しい方法をとらえている。

鈴木正美氏の論文「ドミトリイ・プリゴフにおける詩的言語の実験―声のコラージュから言葉のインスタレーションへ」では，ネクラーソフやサプギール等のリアノゾヴォ派の詩人たちによる「〈声〉のコラージュ」という手法によって創作された実験的な詩を分析している。

鈴木孝庸氏の「平曲における感情表現」は，平家物語における感情表現を，平曲はどのように扱っているのかを確認し，音楽がことばそのものに即かない傾向，感情から離れたことばに即く傾向があることを指摘する。

廣部俊也氏の論文「引用による本文構成についての覚書 ―『好色酒呑童子』を例として ―」は，『好色酒呑童子』の複数のテクストを下敷きにした「もじり」の特徴にふれながら，音声的な類似によるもじりには，まずは言葉の「音」としてのあり方に立ち返って楽しむという側面があり，その点 で，『好色酒呑童子』のように，謡曲から浄瑠璃にいたる音声的テクストを下敷きにして，読者

の耳になじんだ詞章をもじることが効果を上げている作品の存在を確認している。